

使徒の働き16章25－40節 「むち打ちから生まれた救い」

1A 地震でもたらされた救い 25－34

1B 牢の祈りと賛美 25－26

2B 震える看守 27－32

3B 救いの喜び 33－34

2A 長官たちの恥 35－40

1B パウロの抗議 35－39

2B リディアたちへの励まし 40

本文

使徒の働き 16 章を開いてください。私たちは、ピリピにおけるパウロたちの宣教を見ています。前回、パウロが、占いの靈にとりつかれている女から靈を追い出したので、結局、むち打たれて、牢の中に足かせを付けられたところまで見ました。マケドニア人が助けてくださいという夢を、パウロが見て、それでやって来た欧洲における宣教が、こんな形になってしまったのです。ここまで読むならば、気落ちします。事実、宣教の働きには困難があり、気落ちすることでいっぱいです。しかし前回、これは御国の福音が、世に攻め入っているからこそ起こっていることであり、戦いが常にあることを学びました。そこで私たちにとって、何が必要かを最後に分かち合いました。「主にあって、ふんばること」です。主にあって堅く立つことです。今晚は、その、堅く立つところから見ます。

1A 地震でもたらされた救い 25－34

1B 牢の祈りと賛美 25－26

²⁵ 真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。

広場にある裁判席に、引きずり出され、長官たちの一言によって、むち打ちにされ、しかも奥の牢に入れられました。非常に悪い環境の中になります。打たれた背中の傷跡を、看守は、何も手当することはありません。おそらく、汚物もそのままでしょう。思い出すのが、ヨセフのことです。彼も、正しいことを行いました。ところが、主人の妻に言い寄られて、それを拒んだ時に、かえって偽りの告発を受けて、監獄に入れられました。

そして今、真夜中です。これは、少なからず、物理的な夜だけでなく、彼らの宣教の働きにとっての夜とも言えるかもしれません。しかし、そこで彼らは、それでも主がおられる信じました。これが、ふんばること、主にあって堅く立つことです。

彼らはまず、祈りました。ヤコブが手紙でこう言っています。「5:13 あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。」とても、単純な勧めですね。苦しんでいる時に、ふと忘れてしまうのが、祈ることです。自分の苦しい思いを、そのまま主の前に心を注げばよいのです。「詩 62:8 民よ どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を 神の御前に注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。セラ」私たちはとかく、祈ることを最後の手段にします。しかし、最初の手段を持って来るので。パウロとシラスは、この状況において、まず祈りました。

しかし、彼らはさらに一步進んでいます。「神を賛美する歌を歌っていた」とあります。彼らは、主がここにただおられると信じて、祈っていただけではありません。神を賛美するとは、神がこの状況において、それでも支配者であられるということを言い表しているのです。神が、この状況の上におられて、御座に着いているのだと告白しているのです。

そして、先のヤコブの勧めでは、「喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい」とありました。彼らは、この迫害において喜んでいて、それで賛美していました。なぜ、喜ぶことなどできるのか？それは、主がすでに、迫害される者に対する幸いを説いておられたからです。「マタ 5:10-12 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」

迫害があるということは、天の御国がしっかりと、世に入り込んでいることの証しです。悪魔の支配に対して、迫害がないならば、反対に相手にされていないことの証しです。攻め入っているからこそ、反撃もあり、だから主にあって喜びます。使徒たちは、主を見捨てて逃げてしましましたが、主がよみがえられ、聖霊が与えられた後は違いました。「5:41 使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。」ですから、苦しむ時、祈り、そして主のゆえに苦しむならば、それを喜びとみなし、賛美します。

そして囚人たちが、「聞き入っていた」とありますね。ここには、証しがあります。パウロとシラスが、福音を宣べ伝えましたが、この苦しみにあっても、語っていることと行っていることが一貫していました。いざと言う時に、普段から語っていることと一致している時に、人は聞き入ります。

²⁶すると突然、大きな地震が起り、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった。

ここから、主がご自分の力の偉大さを示されます。「イザ 29:6 万軍の【主】はあなたを訪れる。

雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって。」黙示録では、数多くの地震の幻がありますが、そこに主の偉大な力が示されて、天で賛美が起こっている場面が出てきます。主は今、パウロとシラスたちの宣教の中で、その偉大な力の一部をお見せになりました。

それで、主は人々を、罪の縛目から解き放つ方、また、女を占いの靈から解放されたように、悪靈どもの縛りから解き放つ方であります、ここでは牢から解き放ってくださいました。いつも、そうとは限りません。主は、牢の中で死ぬことになる聖徒たちについても、聖書の中で語っておられます。しかし今は、主が、みこころとして牢からの解放を由とされました。それは次に、看守に対する働きかけが、大きな理由です。

2B 震える看守 27-32

²⁷ 目を覚ました看守は、牢の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。

以前、ヘロデ・アグリッパー世がペテロを捕らえて、牢に入れたけれども、御使いが来て、ペテロが出て行った後に、監視していた兵士たちが殺されました。それは、ローマの法律に、監視している看守が囚人を逃した場合、その囚人に課せられた刑と同等の罰が与えられるからです。ですから、看守は、自分が死刑になることは必至であると思ったのでしょう。そのような死は、不名誉だから、死ぬしかないと思っています。

²⁸ パウロは大声で「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。

そうです、今ここで、パウロは、囚人たちの心もつかんでいます。主が、二人を通して囚人たちにも心を与え、脱獄できるのに逃げて行かないで、共にいたのです。

²⁹ 看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。

看守は、ただ囚人たちがいなくなつたと言うこと以上に、今、起つたことについて震えています。それは、主ご自身がここにおられるということを、自分自身が感じ取ってしまったからです。預言者ハバククは、主が彼の訴えを聞いておられ、確かにバビロンを激しく裁かれ、ご自身が戻つてこられる幻を示されました。そして、こう反応しています。「3:16 その音を聞いたとき、私のはらわたはわななき、唇は震えました。腐れは私の骨の内に入り、足もとはぐらつきました。攻めて来る民に臨む苦しみの日を、私は静かに待ちます。」他にも、数々の預言者が震えおののいています。

そして、パウロとシラスの前にひれ伏しています。看守は、自分が彼らを縛り、足かせをつけていました。けれども今、自分自身が主に捕らえられたものとなっているのです。逆転しています。これ

が、主のなさることですね。主にある者が、自由なのです。そして、主に逆らう者は、逆に不自由になる、縛られた者になるのです。

³⁰ そして二人を外に連れ出して、「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。

このピリピの看守、「救われるためには、何をしなければなりませんか」と尋ねています。異邦人であるにもかかわらず、神の救いなどについて、何も知らないはずです。彼はどこかで、彼らの宣べ伝える福音を聞いてはずです。考えられるのは、あの占いの靈にとりつかれた女の言葉です。「16:17 この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」もしougなら、主は、悪靈の言葉でさえ用いられたことになります。悪をも主は良きに計らいます。

³¹ 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

パウロとシラスは、「主イエスを信じなさい」と、まず言っています。これは、信条のように信じなさいと言っているのではなく、「すべて主イエスに自分の身を明け渡して、生きていきなさい」ということです。今、神のご臨在の中で身震いしております、自分はこのままでは滅びると悟っているのです。その中で、主イエスこそが救いの道であると教えており、それでこの方にすべてを明け渡しなさい、と言っています。

というのは、信じるといつても、行いのない信仰は死んだのと同じであると、ヤコブが手紙の中で話しているからです。救われるのは信仰のみですが、その信仰は頭で理解することではなく、人格的に、自分の身を任せ、委ねるということです。信頼する、イエスに身を寄せるということです。

そして、ここで特徴的なのは、「あなたもあなたの家族も」ということで、家族も含めていることです。これまで、私たちは見てきました、コルネリウスの家でも、コルネリウスだけでなく、家の者たち全員がペテロのことばを聞いて、信じて、聖靈のバプテスマ、また水のバプテスマを受けました。このピリピにおいても、すでにリディアとその家族が、バプテスマを受けています。個々人の救いもありますが、このように、家族の救いというものもあります。家族の救いは、個々人の信仰の決断を否定するものではありません。その一人一人が、信じないといけません。けれども、主は、家、また家のかしらというものを、大切にされます。個々人はいるのですが、その構成員は、家の中にいるのです。その主(あるじ)の信仰によって、自分自身も主イエスを信じることはあります。

³² そして、彼と彼の家にいる者全員に、主のことばを語った。

ただ「主イエスを信じなさい」ということばだけでなく、主のことばを聞かせました。主イエスがだれ

なのか、どんなことをしたのか、そしてこの方が、私たちの罪のために十字架で死なれたが、三日目によみがえり、主ともキリストともされた、ということです。その福音のことばで、彼らは主を信じて、救われたのです。

3B 救いの喜び 33-34

³³ 看守はその夜、時を移さず二人を引き取り、打ち傷を洗った。そして、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けた。

ここに、看守の信仰が真正であることをよく示しています。行いがともなっているのです。彼は、二人に対して行ったひどい仕打ちに対して、速やかに打ち傷を洗うことをしました。

それから、バプテスマです。しかも「すぐに」です。バプテスマについて、いろいろな意見があります。はたして、本当に信じたのかどうか、その人を見て、確かめる必要があるというのは必要でしょう。けれども、バプテスマを受けるために、何かいろいろなことをしなければいけないというのは違います。信じて、バプテスマを受けるのです。バプテスマは、言い換えれば、信じていることを人々の前で見せることです。

³⁴ それから二人を家に案内して、食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ。

すばらしいですね、バプテスマの後の食事です。旧約時代の祭司の制度では、全焼のいけにえがあり、また穀物の供え物があって、さらに交わりのいけにえがありました。交わりのいけにえが、いわば食事の時間です。主に全てをお献げするいけにえを献げます。それがバプテスマです。そして、食事をして、信じたことについて共に喜びを分かち合うのです。

2A 長官たちの恥 35-40

1B パウロの抗議 35-39

³⁵ 夜が明けると、長官たちは警吏たちを遣わして、「あの者たちを釈放せよ」と言った。³⁶ そこで、看守はこのことばをパウロに伝えて、「長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、使いをよこしました。さあ牢を出て、安心してお行きください」と言った。

これは、あまりにも身勝手、いや、とんでもない罪の隠蔽です。むち打ちですが、何ら裁判を行つておらず、それで、むち打ちにしていました。これは、彼らのローマ法に違反することです。それを、無きことにするために、ただ二人を釈放しているのです。

³⁷ しかし、パウロは警吏たちに言った。「長官たちは、ローマ市民である私たちを、有罪判決を受け

ていないので公衆の前でむち打ち、牢に入れました。それなのに、今ひそかに私たちを去らせるのですか。それはいけない。彼ら自身が来て、私たちを外に出すべきです。」

ローマ法において、ローマ市民は、皇帝に上訴する権利までありました。それを、有罪判決を受けていないのに、公衆の前でむち打ち、そして牢に入っています。このことがローマに知られたら、この長官たちの首が飛ぶだけでなく、彼らこそが牢獄に入れられなければいけない罪を犯していました。ですから、パウロは抗議したのです。

また、ローマ市民であったのですから、むち打ちにした時、彼らがユダヤ人でローマの慣習に従っていないといった、あの訴えがいかに滑稽だったかを思います。ローマ市民ですから、まさに植民都市ピリピにふさわしい人物たちだったのです。

³⁸ 警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、二人がローマ市民であると聞いて恐れ、³⁹ 自分たちで出向いて来て、二人をなだめた。そして牢から外に出し、町から立ち去るように頼んだ。

ここで、長官たちは人々の前で、二人を丁重に連れて行きました。二人は公衆の面前で恥をかかせられましたが、今は、この二人が恥をかいています。

そして、町から立ち去るよう言っていますね。これは、レギオンの時も起こりましたね。悪霊を主が追い出したら、そこから出て行ってほしいと言いました。このように福音は、人々の闇を明らかにします。このピリピでは、占いの靈によって女を縛ってまで、金儲けをしていた者たちがおり、また、そういった者たちの歓心を買うために、自分たちの法律さえ破っている長官たちです。ローマの慣わしとか言って、植民都市の誇りをふりかざしていましたが、ローマの風上にもおけないとをしていました。そうした、自分たちの基準さえ満たしていないことが、パウロたちの福音宣教によって、すべて明らかにされました。それで、出て行ってほしいと言っています。

2B リディアたちへの励まし 40

⁴⁰ 牢を出た二人はリディアの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから立ち去った。

リディアの家には、他に兄弟たちがいました。すでに、リディアの家は、教会になっていたことがうかがえます。

ここで、どうしてパウロが、ローマ市民であることを強く訴えたのか？を考えたいと思います。答えは、残されるピリピの人たちのことを考えてのことです。ここで、彼らが不利な立場に置かれないように、しっかりと不当を明らかにしておかなければいけないと、パウロたちは思ったのでしょう。

パウロは、ローマ市民権を持っていることを、宣教のために用いました。それにより頼むことはありませんでしたが、市民権を行使することによって、福音の妨げになるものを取り除けるなら、取り除いていったのです。キリスト者の中で、すでに与えられている法律や権利があっても、それを悪い意味で行使しないことがあります。福音のために、必要ならば行使して良いのです。

また、宣教について言えるのは、日本の旅券は、ビザなしで行ける国々はいつも、世界第一か第二位です。それだけ日本は信頼されています。けれども、旅券保持の人口に対する割合は非常に小さいです。いろいろな権利や自由が与えられているということ、それが宣教のために用いることができるかもしれませんと考え、祈るのは大事です。

次回は、テサロニケにおける宣教です。